104SD055(02)

音楽と旅を愛するすべてのみなさまへ

お客様満足度100%+αを追求するサービスマインドで

お客様のニーズに合わせた高付加価値の商品、サービスの提供に努めています。

人と人、人と場所、人と文化を結ぶ掛け橋であるために。

私たちはトップツアー株式会社です。

東急観光が社名を変えました。
トップツアー株式会社
観光庁長官登録旅行業第38号 ©日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒153-8550 東京都目黒区東山3丁目8番1号
TOPTOUR http://www.toptour.co.jp

20th Anniversary
Tokyo New City Orchestra

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

TOKYO NEW CITY ORCHESTRA

東京ニューシティ管弦楽団
第69回定期演奏会

2010年7月16日（金）19時開演

東京芸術劇場大ホール
Tokyo Metropolitan Art Space Large Hall

主催：東京ニューシティ管弦楽団

Members

音楽監督・常任指揮者　内藤 彰
首席客演指揮者　曽我 大介
客演指揮者　アンドレイ・アニハーノフ
コンサートマスター　鈴木 順子※
客員コンサートマスター　浜野 考史

●第1ヴァイオリン
有村　実保子※
池澤　卓郎※
石井　啓太※
伊東　佑樹※
上田　博司
大竹　奏
小澤　郁子
剣持　由紀子
小島　光敬
齋田　真紀※
笹井　飛鳥※
出口　順子※
寺田　久美子※
徳井　えま※
中川　さと子※
中澤　真理子※
中村　朱見
安田　貴裕※
山川　奈緒子

●第2ヴァイオリン
○岡田　邦子※
荒巻　泉※
大塚　杏奈※
栗原　りか
小林　清美※
高階　久美子※
高原　久実※
富山　ゆりえ
深澤　聡子※
松岡　聡子※
山江　洋子※
山本　有紗※

●ヴィオラ
○中山　良夫※
浅川　文※
宇佐美　久恵※
久郷　寿実子※
桜井　多美子※
竹鼻　江美子※
堀江　冬子※
三上　賢一※

●チェロ
○齋藤　章一※
大島　純※
葛西　英一
冨成　倫子※
橋本　しのぶ※
平山　正三※
船田　裕子※
星野　敦※
望月　直哉※

●コントラバス
○徳高　宏行※
青山　幸成※
石川　仁※
大黒屋　宏昌※
高橋　直人※
松井　理史※

●フルート
○井ノ上　洋※
冨田　朗子※
丸田　悠太※

●オーボエ
○徳田　振作※
池田　祐子
川城　恵※

●クラリネット
○西尾　郁子※
松元　香※
吉田　記子※

●ファゴット
○霧生　吉秀※
藤田　旬※
松里　俊明
飯塚　美穂※

●ホルン
○大森　啓史※
飯島　さゆり
猪俣　和也
小川　正毅
木原　英土※
広川　実
古江　仁美※
松浦　光男※

●トランペット
○中西　清一※
後藤　慎介※
依田　泰幸※

●トロンボーン
○渡辺　善行※
恵藤　康充※
西岡　基
南城　友恵※

●チューバ
○田中　優幸※
松下　晃一

●ティンパニ&打楽器
○藤城　佳之※
阿部　剛※
大河原　渉※
小山　有紀※
辻本　洋一※

●ハープ
平山　菜津子※
平島　さより

50音順

○印は本日の首席奏者
※印は本日の出演者

パーソネルマネージャー
山川　奈緒子

ステージマネージャー
青木　勝弘

ライブラリアン
長田　康宏

〔事務局〕

事務局長　高松 正典　営業・企画　上原 久幸　森田 祐世
事務局スタッフ　桜井 聖子　福島 貴子　森本 芙紗慧　相吉澤 絵里　石本 順子　山本 ふさこ
チケット・デスク　武曽 眞紀子　木村 有美子

マーケティング・アドヴァイザー　石井 友二・本田 瑞穂　イメージコーディネーター　古山 忠男・嵯峨 亮子

Program

The 69th Subscription Concert

第69回定期演奏会

〈創立20周年記念演奏会〉

指 揮：**内藤 彰** Conductor: NAITO Akira
コンサートマスター：**鈴木 順子** Concertmaster: SUZUKI Junko
ヴァイオリン：**浜野 考史** Violin: HAMANO Takashi 当団客員コンサートマスター

●指揮者によるプレトーク　18:55～

貴志 康一／
ヴァイオリン協奏曲
KISHI Kouichi / Violin concerto

第1楽章　Allegro molto
第2楽章　Quasi andante
第3楽章　Molto vivace

休憩15分—intermission [15′]

ブラームス／
交響曲第4番 ホ短調 作品98
Johanners Brahms / Symphonie Nr.4 in e-Moll op.98

第1楽章　Allegro non troppo
第2楽章　Andante moderato
第3楽章　Allegro giocoso
第4楽章　Allegro energico e passionato

平成22年度文化芸術振興費補助金
（芸術創造活動特別推進事業）

お願い　演奏中は、携帯電話・アラーム付時計等は演奏の妨げにならないようご配慮ください。
他のお客様のご迷惑になる様なご行為は慎しんで頂きますようお願い申し上げます。

頭部があった!

揮者

きな序奏が多いことをご存知ですか。
きなりアレグロの主部(第1主題部)か
有名な序奏部は、作曲開始から十数
取り入れて作られた楽章の終結部(コ
ンポを想定して、付け加えられました。
いう意味で、(Allegro) sostenutoと
ました。
の方が速く演奏されるべきとして、コ
no Allegroに変更しました。しかしブ
違いされて♪単位の遅いテンポで演
llegroより少し遅いだけで、あまり遅く
にはun poco(少し)を付け、(Allegro)
両部分ともブラームスの頭の中では
とにはなんら変りありません。
ブラームスの意思とは裏腹に、いつの
によって、主部やコーダとは無関係に
の序奏部のごとく遅いテンポで演奏
界中でその誤ったテンポがブラーム
に慣れ親しんでしまっています。
演奏会で演奏しました様に、1小節を
ンポを想定して書かれており、これを
ーダ間がブラームスの計画どおり相互

(2種の和音のみ)が演奏されます。
いう呼び方の方がぴったりでしょう。
ら始まるように計画され、1885年10月
ました。その後半年以上にわたる各
尊敬する大ヴァイオリニスト、ヨーゼフ・
見える冒頭部(わずか4小節で、第3
る)が、使用中の自筆総譜の第1楽章

冒頭部の意義;

第1番では前述のように、主部と密接な関係を持ち、さらにコーダ部とのシンメトリーを意識して作曲されたことが、付け加えられた序奏部に大きな意味をもたらしました。

第3番では冒頭の音の進行(ファ→ラb→ファ)が、作曲上の重要な要素としてこの楽章を通じて様々にヴァリエーションされ使われている点で、なくてはならないとても大切な役割を担っています。

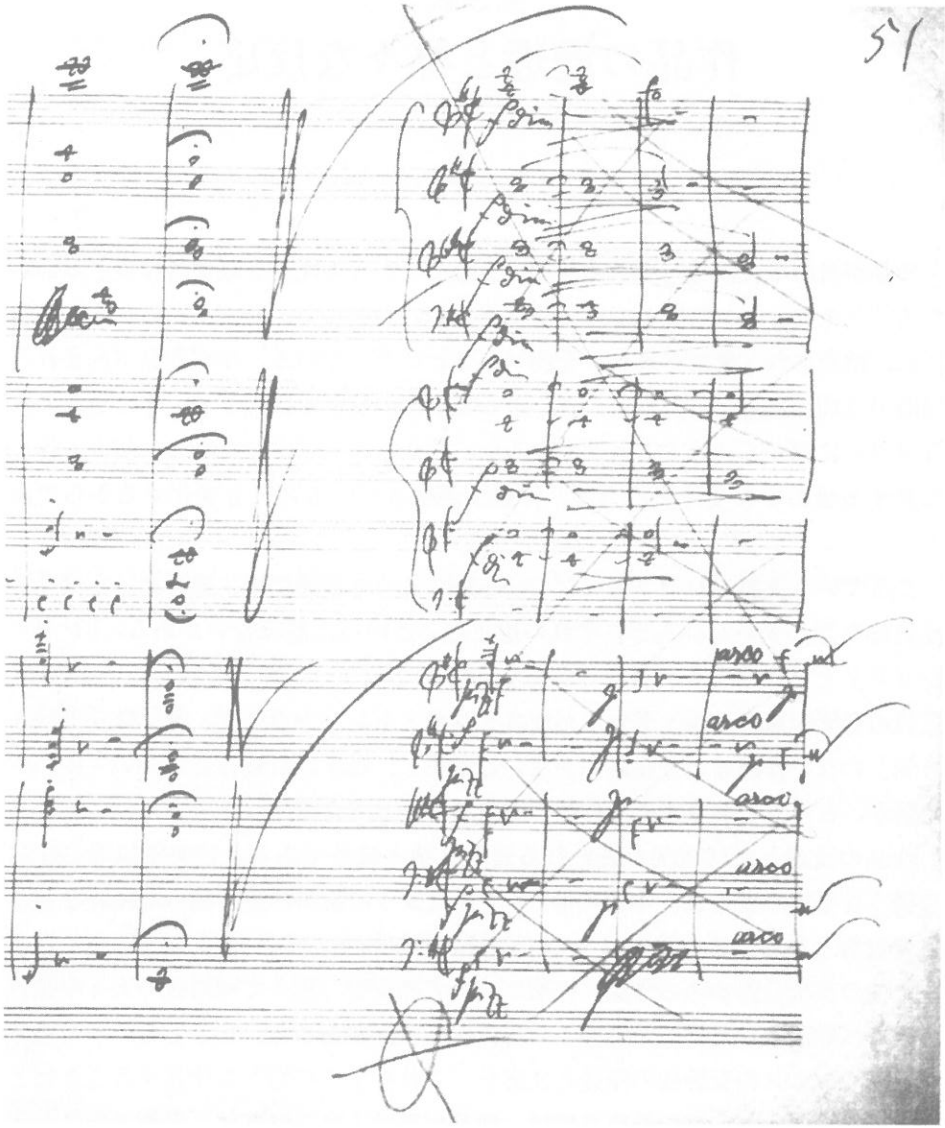
これに対し第4番で付け加えられた冒頭部は、見た目は第3番と酷似していますが、主部以降との関連性が希薄であり(コーダ部分で付け加えられた冒頭部とのシンメトリーが見られるものの)、内容的には第3番における冒頭部のモチーフの重要性に比べて、その存在価値はやや薄いと言わざるを得ません。

とは言えたとえ大親友の勧めがあったとしても、ブラームス自身、現在のようにいきなり主題から始まる方法に満足していなかったからこそ、お披露目演奏旅行中に冒頭部が書き足され、何回かの公演で実際にブラームス自身がそのように指揮し、その結果彼は一定の満足感を得ることができたのです。そのことは、初版用の伝言として、自筆譜の書き込み部分に'曲の冒頭に書き加えるように'との指示を書き込んだことからも判ります。彼自身による2台ピアノ用の編曲譜(自筆譜紛失)にも書き加えられたそうです。どういう経緯で最終的に印刷されなかったのか定かではありませんが、もしブラームス自身の意思で割愛したとしても、ひょっとしてもう少し長生きしていたら、また気が変わって復活した可能性も大いにありえます。そういう試行錯誤はほとんどの作曲家の常ですから。

ご存知のように、ブルックナーの交響曲は、最終稿に至るまでの試行錯誤中に一旦出来上がった幾つかの稿が存在し、最終意思は最終稿にあるとはいっても、その間に作られた稿もその時々における作曲者の意思であり価値があるとの判断の下、ひとつの交響曲が幾種かの版となってそれぞれ出版され、それらが実際に現在でも多く演奏されています。

そういう意味で、今回まだどなたも聴いたことのない「交響曲第4番冒頭部付き」に焦点を当てることは大変興味深く意義深い試みであると私は思っております。

今後この冒頭部を採り入れずに、いきなり弱奏の主題から始まる従来どおりの演奏をしていく場合においても、大変緊張を要する冒頭の第一ヴァイオリンの旋律開始部分に、この幻の冒頭部がブラームスからの何らかの暗示を与えてくれる可能性は大であり、今回は大変貴重な試みとなるものと確信しております。



交響曲第4番自筆譜の第1楽章最終ページ部分。
最終和音の後に冒頭部への追加分が書かれ、後に撤回されたことがわかる。

芦屋浜の高台を訪れて

東京ニューシティ管弦楽団・客員コンサートマスター　浜野 考史

6月初旬、神戸・芦屋の甲南学園貴志記念館を訪問した。
天候にも恵まれて、高台にある甲南学園高校の講堂から芦屋浜の海が見えた。
彼も見ていた海だ。

貴志康一という作曲家を知ったのはヴァイオリンとピアノのための作品、竹取物語、漁夫の唄、龍の3曲を弾いてから。
僕はヴァイオリニスト魂をくすぐる、なんと品の良い作品だろう、と虜になった。
彼は戦前にヨーロッパで、カール・フレッシュの門をくぐったヴァイオリニストであったから当然のこと、歌うメロディー、走り回るパッセージはヴァイオリンを弾く者に快感をもたらす・・・。

以前から彼の協奏曲の存在は知っていた。

時を経て、夢が叶うように演奏する機会を得、僕の手許に楽譜が到着した。しかし練習を進めていくにしたがって、いくつかの音符の流れが腑に落ちない。
自筆譜を見たいとの思いが募った。
甲南高校の講堂の一室のドアを開けると大きな彼のプロマイドが出迎えてくれた。
さあ、自筆譜との対面だ。
予想通り、複写に反映されていない朱色、青色と黒色の鉛筆で書かれた書き込みがあった。
このスコア原譜は彼が亡くなって以降、誰も使っていないという。
僕が腑に落ちなかったメロディーの音域は色鉛筆でオクターヴ上げるように指示されていたし、他の箇所も効果的な指示があった。
これらの加えられた指示は初演の際にゲオルグ・クーレンカンプとの合わせの中で彼が書きこんだのであろうか。

驚いたのは第3楽章に大胆なカットが書かれていたこと。
15分以上という異例に長い、ロンド的なフィナーレをコンパクトにしたかったのか。
この楽章のスコアには、音符の並んでいない隙間に鉛筆によるスケッチがたくさん描かれていた。
まだ推敲がしたかったのではないか。

当時、貴志康一、24歳。亡くなったのは28歳。
今の僕よりずっと年下である。若い作曲家の仕事を見るようでなんとも親しみが湧いた。
天才と呼ばれた人の人間味がそこにはあった。

彼の生きた20世紀前半の時代はヴィルティオーゾの時代であった。聴衆が聴きやすく受け入れられるよう、楽曲の長さ、音符の書き換えなど演奏家が自由に弾いた時代でもあった。

しかし21世紀の現代は原典主義の時代、作品の本来の姿を追い求める時代といえる。
カットについてはどのようないきさつであったのか不明であるが故、本日はカットなしで演奏することにしたい。

最後にご協力いただいた甲南学園貴志記念室の関係者方々にお礼申し上げます。